

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

■ 2023年9月1日(金) 11:00 ~ 12:00 | ■ RY205 良心館2階 R Y 2 0 5 番教室

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-02] 競争下での自動模倣

共感性との関連も含めて

*田中 美吏¹、廣光 佑哉²、細野 桃子¹、三森 裕希子¹ (1. 武庫川女子大学、2. 同志社大学)

[03心-ポ-04] 映像の自己選択後の観察が誤差情報のエラー検出へ及ぼす影響

*廣光 佑哉¹、田中 美吏²、北島 孟³、石倉 忠夫¹ (1. 同志社大学、2. 武庫川女子大学、3. 金沢学院大学)

[03心-ポ-06] 認知課題の遂行が精神的負担に及ぼす影響

*大久保 瞳¹、高井 秀明¹ (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-08] トランポリン跳躍により垂直跳び高とその自己推定に生じる後効果の経時的消失過程

*井出 拓見¹、荒牧 勇¹ (1. 中京大学)

[03心-ポ-10] ブランコ漕ぎにおける見えない力の検討

VRブランコでの位相シフト

*平田 智秋¹、北原 俊一¹ (1. 十文字学園女子大学 教育人文学部 心理学科)

[03心-ポ-12] 時間制約および空間的不確実性の変化が打撃パフォーマンス及び打球運動に及ぼす影響

*林 大貴¹、福村 寿華¹、森 司朗¹、中本 浩揮¹ (1. 鹿屋体育大学)

[03心-ポ-14] 大学スポーツにおける2年生の役割とチームへの関わり方の検討

大学女子ラグビー部を対象として

*坂部 崇政¹、高井 秀明¹ (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-16] 大学運動部活動における動機づけ雰囲気、勝敗に対する態度、オーバーコミットメントの関係

個人種目と集団種目に着目して

*高山 優明¹、中須賀 巧¹ (1. 兵庫教育大学大学院)

[03心-ポ-18] 競技中の自動思考とパフォーマンス向上にもたらす機能

大学生競泳競技者を対象とした質問紙調査

*伊藤 浩一¹、土屋 裕睦² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

[03心-ポ-20] サッカー選手におけるレジリエンスが運動再投入と意思決定再投入に及ぼす影響

*北橋 達朗¹、高井 秀明¹ (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-22] サッカー選手における創造性とマインドワンダリング傾向の関係

*長 雄希¹、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院人間総合科学学術院、2. 筑波大学)

[03心-ポ-24] 情動知能と自己効力感が運動課題前後の脳波と気分に与える影響

*西垣 景太¹ (1. 東海大学 健康学部)

[03心-ポ-26] 中学校体育授業における自己調整学習の予備的検討

*須崎 康臣¹、久保 研二¹ (1. 島根大学)

[03心-ポ-28] 対人ストレス及び自己意識があがりに与える影響

大学生アスリートを対象とした量的研究

*大田 亜海¹、土屋 裕睦² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)**[03心-ポ-30] スポーツ指導現場における体罰発生に関する先行研究の質的検討**

体罰が正当化される心理的メカニズムに着目して

*伊藤 麻由美¹、豊田 則成² (1. 帝塚山大学、2. びわこ成蹊スポーツ大学)**[03心-ポ-32] 大学入学時までの運動経験が形成する心理特性**

自己愛・特性的自己効力感・レジリエンスに着目して

*長田 実莉¹、小口 愛海¹、小坂橋 京汰¹、遠藤 慎也²、西垣 景太^{1,2} (1. 東海大学大学院 健康学研究科、2. 東海大学 健康学部)**[03心-ポ-34] トライアスロン競技における心理的特徴**

運動依存と心理的競技能力に着目して

*小口 愛海¹、長田 実莉¹、小坂橋 京汰¹、遠藤 慎也²、西垣 景太^{1,2} (1. 東海大学大学院 健康学研究科、2. 東海大学 健康学部)**[03心-ポ-36] 2型糖尿病患者のセルフエフィカシーと生活習慣実態および血糖管理の関連性**

治療行動に対する運動・食事・投薬のセルフエフィカシーに着目して

*門脇 未来¹、西垣 景太^{1,2} (1. 東海大学健康学研究科、2. 東海大学健康学部)**[03心-ポ-38] 高い運動習慣を有する者における運動と認知機能の関係***土田 幸男¹ (1. 大阪体育大学)**[03心-ポ-40] 大学生におけるゲートボールの実施が心理面に及ぼす影響について**

運動有能感と気分状態に着目して

*柴原 健太郎¹ (1. 北九州市立大学)**[03心-ポ-42] コロナ禍から現在にかけての大学生の運動実施状況とメンタルヘルスの変化***辻田 佳保里¹、西口 治佳¹ (1. 太成学院大学)**[03心-ポ-44] 女性スポーツ競技者の食行動異常に関係する適応・不適応的感情調節方略***相羽 枝莉子¹、松田 晃二郎²、杉山 佳生³ (1. 長崎国際大学、2. 熊本学園大学、3. 九州大学)**[03心-ポ-46] アスリートの制御焦点が試合中の対処方略とパフォーマンスに及ぼす影響***相川 聖¹、高井 秀明² (1. 関西学院大学、2. 日本体育大学)**[03心-ポ-48] フィギュアスケート競技者に着目した「不安」「緊張」と実力発揮との関連性***門前 朋実¹、笹場 育子¹ (1. 立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科)**[03心-ポ-50] 大学新入生に対する適応支援プログラム介入の効果**

質問紙調査による縦断的検討

*渡邊 浩輝¹、三石 祐馬¹、池田 和司¹、渋谷 愛佳¹、大田 亜海¹、伊藤 浩一¹、中山 亜未²、菅生 貴之³、土屋 裕睦³ (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学スポーツ科学センター、3. 大阪体育大学)**[03心-ポ-52] 大学生アスリートにおける認知的方略と心理的競技能力の関係***藤本 太陽¹ (1. 福山平成大学)**[03心-ポ-54] ソフトボールの守備におけるプレッシャー下での失敗から成功に至るまでの思考の推移***細野 桃子¹、田中 美吏²、三森 裕希子² (1. 武庫川女子大学大学院、2. 武庫川女子大学)

[03心-ポ-56] 女子ラグビー選手の状況判断に関する検討

ポッドアタック時の視点に着目して

*人羅 美帆¹、高井 秀明²、坂部 崇政² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)**[03心-ポ-58] 移動行動時の姿勢動揺リスクを考慮した動作準備の最適化**

行動選択肢の確率操作を用いた検証

*渡邊 諒¹、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学)**[03心-ポ-60] 不器用な人の支援を目指したVRボール捕球システムの開発***清水 海斗¹、井上 純輝^{2,1}、渡邊 諒¹、梅森 拓磨¹、白川 由佳^{3,5}、中本 浩揮⁴、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学、2. ソニーグループ株式会社、3. 慶応義塾大学、4. 鹿屋体育大学、5. 日本学術振興会特別研究員)**[03心-ポ-62] 視覚誘導性自己運動感覚（ベクシオン）と身体運動経験の関係***小林 莉子¹、妹尾 武治²、森 将輝¹ (1. 慶應義塾大学、2. 九州大学)**[03心-ポ-64] スポーツ版実行機能質問紙の妥当性**

ストループテストによる検討

*浦 佑大¹、高井 秀明² (1. IPU・環太平洋大学、2. 日本体育大学)**[03心-ポ-66] 身体図式の構築から捉えた技術習得過程の特徴**

身体性のあり方を捉える試み

*小谷 克彦¹ (1. 北海道教育大学)**[03心-ポ-68] 高校野球・リーダーとフォロワーの関係**

変革型リーダーシップの視点からとらえた指導者と選手の関係

*柴山 寿治¹、来田 宣幸¹ (1. 京都工芸繊維大学)**[03心-ポ-70] スポーツとGrit（グリット）の現状と研究動向について***岩尾 敬太¹ (1. 国士館大学大学院)**[03心-ポ-72] 直線狭路における自転車走行中の頭部動作と眼球運動の相互相関***小嶋 岳¹、長 雄希¹、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-02]競争下での自動模倣

共感性との関連も含めて

*田中 美吏¹、廣光 佑哉²、細野 桃子¹、三森 裕希子¹ (1. 武庫川女子大学、2. 同志社大学)

競争下での運動行動を明らかにする研究が、これまでに多大に行われてきた。これらでは、競争下での個人内の運動行動の変化を調べることが主流であったが、近年は個人間の運動行動への影響を調べる研究も行われ始めている。本研究は、競争下における個人間の運動行動を調べる研究の一環として、他者運動の観察が自己運動に影響する自動模倣に着目し、競争が自動模倣に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。さらに、自動模倣の機序となるミラーニューロンシステムの賦活には、共感性の高さが関与する（池田ほか、2016）。このことを参考に、競争下での自動模倣と共感性の関連も検討した。

大学生36名（男性18名、女性18名）を対象に、ディスプレイ上で他者の指上げ運動を観察しながら自己の指上げ運動を行う選択反応サイモン課題を行わせた。この課題における一致条件（他者運動と自己運動が同じ）と不一致条件（他者運動と自己運動が異なる）の反応時間差によって自動模倣を定量化した。この課題を非競争条件で60試行実施させるとともに、サイモン課題の早さと正確性の結果を基に3名中1名は4,000円の報酬が得られる競争条件でも60試行実施させた。そして、反応時間差について非競争条件と競争条件の平均値比較を行ったが、有意差は見られなかった。

共感性との関連については、多次元共感性尺度（鈴木・木野、2008）を活用した。全実験参加者にこの尺度に回答させ、「被影響性」「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」「自己指向的反応」の5つの各因子の得点と反応時間差について相関分析を行った。その結果、「自己指向的反応」と反応時間差に有意な正の相関が認められた。これらの結果は、競争下での自動模倣の増減には個人差がある中で、自己指向的反応が強い個人は非競争下では自動模倣が生じにくいものの、競争下では自動模倣が生じやすいことを意味する。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-04]映像の自己選択後の観察が誤差情報のエラー検出へ及ぼす影響

*廣光 佑哉¹、田中 美吏²、北島 孟³、石倉 忠夫¹ (1. 同志社大学、2. 武庫川女子大学、3. 金沢学院大学)

近年、観察学習を行う際に、映像を学習者自身が選ぶことで、運動学習を促進することが報告されている。その背景として、選択行為は学習者のエラー検出を強化する可能性が報告されている。しかし、そのことを実証した研究はなく、映像の自己選択後にヒトはどのように情報を知覚しているかは不明瞭である。本研究では、自己選択した映像の観察に対して意図的に速度の異なる誤差情報を発生させ、その検出の正確性や早さを調べることで、自己選択がエラー検出に及ぼす効果を検討した。

実験課題に未経験な18～30歳の大学生および大学院生28名を対象とした。実験参加者にキータッピングの映像を観察させ、デモ映像とテスト映像が同じ速度か遅い速度かを判断する課題を行わせた。テスト映像ではデモ映像より誤差の生じる映像を提示した。テスト映像の誤差はデモ映像と比較して、0ms、50ms、そして100ms遅い映像(i.e., 誤差要因)であった。選択要因について、実験参加者に選択条件と非選択条件をランダムな順序で各条件72試行実施させた。選択条件は、3つの映像の中から実験参加者が視聴したい任意の映像を選択させた。非選択条件では、ソフトウェア上でランダムに視聴する映像を決定した。実験参加者は選択後に映像を視聴し、デモ映像と比較してテスト映像が同じか遅いかを1500ms以内に決定させ、その正答率と反応時間を収集した。

実験の結果、正答率は誤差要因のみ主効果が確認され、誤差0msと比較して50msと100msは正答率が低く、100msより50msの方が正答率は低い事が示された。また、反応時間は選択要因の主効果が確認され、選択条件は非選択条件より反応時間が長い事が示された。以上の結果は、映像の自己選択が観察対象へより注意を向けることを示唆しているが、正答率の増加は示されなかったことからエラー検出の強化への寄与までは示されなかった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-06]認知課題の遂行が精神的負担に及ぼす影響

*大久保 瞳¹、高井 秀明¹ (1. 日本体育大学)

球技スポーツの競技者には、精神的負担がかかる中で、相手や周囲に注意を向け、相手の行動や状況を判断して、次の動作や戦術を瞬時に実行することが求められる。このような競技者の状況判断は、実行機能と密接に関係していることはいうまでもない。実行機能とは、目標達成のための計画を立案し、行動や思考を抑制する高次機能であり（Miyake et al., 2000）、抑制、作業記憶、認知的柔軟性といった下位機能に大別される（東浦・紙上、2017）。これらの下位機能を測定する認知課題と精神的負担との関係について詳細に確認することができれば、状況判断場面での認知的な負荷を客観的に評価することが可能となるだろう。そこで本研究では、認知課題の遂行が精神的負担に及ぼす影響について検討することを目的とした。実験参加者は、体育系のA大学に所属する学生72名（実験1：男性12名、女性12名、実験2：男性12名、女性12名、実験3：男性12名、女性12名）であり、エディンバラ利き手テストによって右利きと判定された者であった。課題は、実験1ではフロッカー課題（反応様式：Non-Cross、Cross）、実験2ではスタンバーク課題（記憶負荷：3文字、5文字、7文字）、実験3ではタスクスイッチング課題（課題の種類：大小課題、奇偶数課題、混合課題）を用いた。また、精神的負担の評価には、日本語版 NASA-TLX（芳賀・水上、1996）を使用した。その結果、知的・知覚的要求の得点は、フロッカー課題では Cross条件が Non-Cross条件より有意に高く、スタンバーク課題では5、7文字条件が3文字条件より、7文字が5文字条件より有意に高く、タスクスイッチング課題では混合課題が大小課題、奇偶数課題より有意に高かった。よって、認知課題の遂行が精神的負担に及ぼす影響としては、各課題の難易度に応じて異なる特徴をもつことが明らかとなった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-08] トランポリン跳躍により垂直跳び高とその自己推定に生じる後効果の経時的消失過程

*井出 拓見¹、荒牧 勇¹ (1. 中京大学)

トランポリンを跳躍した後に通常の地面で垂直跳びを行うと、普段よりも跳躍高が低下する。また、その際に自分が何cm跳躍することができたかを主観的に推定すると、低下した実際の跳躍高よりもさらに低い跳躍高を解答してしまう。しかし、垂直跳びの試行回数を重ねるにしたがって跳躍高は回復し、かつ自分の跳躍高を正しく推定できるようになる。これらのことは、身体運動そのものや、身体運動への認知において生じる後効果が、身体運動の試行回数に依存して減少することを示している。これに対して本研究では、身体運動とその認知に生じる後効果が、単なる時間の経過によっても減少するのかを検証する。

13名の被験者は、トランポリンを跳躍する前後に垂直跳びを行った（Pre測定、Post測定）。Pre測定では、自身の実際の跳躍高が実験者からフィードバックされた。トランポリンを30回跳躍し終えてからPost測定を開始するまでは、トランポリン跳躍終了直後にPost測定を行う0min条件から1分刻みに、4min条件まで設定した。Post測定では垂直跳びを行った際に、Pre測定の跳躍高を参考に、自身の実際の跳躍高（Real Height: RH）が何cmであったかを主観的に推定し、実験者に口頭で伝えた（Estimated Height: EH）。

0min条件では、Pre測定に比べてRHが有意に低下し、EHはその低下したRHよりもさらに低下していた。一方で、RHが1min条件において既にPre測定と同じ程度の跳躍高まで回復したのに対して、EHは3min条件においてようやくRHと同等な高さにまで回復した。これらの結果は、身体運動とその認知に生じる後効果は、たとえ身体運動の試行回数を重ねなくても、単に時間が経過するだけで減少すること、そしてそれらは時間の経過によってそれぞれ異なる減少プロセスをたどることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-10]ブランコ漕ぎにおける見えない力の検討

VRブランコでの位相シフト

*平田 智秋¹、北原 俊一¹ (1. 十文字学園女子大学 教育人文学部 心理学科)

ブランコ漕ぎの増幅過程において、ブランコ座面と上体動との位相の漸進的なシフトが確認されている(Hirata, et. al., 2023)。この位相シフトの時間幅はブランコの1周期（およそ2500ms）あたり約10m s程度である。このように微細な動きが意図的に制御されているとは考えにくい。このように精緻な位相シフトは、見えない力、すなわち遠心力や慣性力などに導かれていると仮説をたてた。たとえばブランコの速度、振幅に比例する慣性力によって上体が背面方向に押されているとすれば、上体動は意図の有無に関わらず、約10m s単位の精緻な動きをしよう。上体の動きの大きさやタイミングから実ブランコ漕ぎにおける増幅量をほぼ正確に予測する力学モデルをVR（バーチャル・リアリティ）環境に埋め込み、VRブランコを実現した。VR環境を選択した理由は見えない力、つまり慣性力や遠心力が生じ得ないからである。本研究ではVRブランコ漕ぎにおける上体動を解析し、実環境におけるブランコ漕ぎと同様、位相シフトが生じるかを検討する。閉眼でも実ブランコを漕げることから分かる通り、ブランコ漕ぎにおける視覚の役割は限定的であり、視覚情報のみを呈示するVR環境でのブランコ漕ぎは極めて困難である可能性がある。本研究ではVR環境でブランコを漕げる実験参加者を10名程度集め、上体動を解析して上記の仮説を検証する。もしVRブランコにおいて位相シフトが生起しなければ、位相シフトは見えない力によって導かれている可能性が高い。周期的に運動するブランコと上体動との位相は、道具を使うヒトの周期動作の理解に有効な指標となると考える。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-12]時間制約および空間的不確実性の変化が打撃パフォーマンス及び打球運動に及ぼす影響

*林 大貴¹、福村 寿華¹、森 司朗¹、中本 浩揮¹ (1. 鹿屋体育大学)

野球の打撃は打率3割を打てば1流といわれるほど難しいものである。本研究では、この難度の要因として、時間的制約と不確実性に着目する。時間的制約が厳しくなることや、反応すべき選択肢の数が増え不確実性が高まることによって課題成績の低下や反応時間の遅延が生じることが報告されている。しかし、実際に時間制約と不確実性を系統的に操作し、野球の打球運動やパフォーマンスに及ぼす影響を調査した研究は見当たらない。そこで本研究では、時間的制約と不確実性の増大が打撃運動の知覚-運動制御に関わる情報処理に制約をもたらすことで打撃困難になるとの仮説を検証することを目的とした。実験課題として、大学野球選手を対象としたVR

（バーチャルリアリティ）上での野球の打撃課題を行った。時間的制約は投手のリリースからホームプレートまでの投球到達時間である TTC（Time to contact）を操作した4つの条件

（500ms・450ms・400ms・350ms）、不確実性は投球到達位置の垂直方向の標準偏差を操作した3つの条件（標準偏差小・標準偏差標準・標準偏差大）の合計12条件を行った。打撃パフォーマンスの指標として、バットとボールのコンタクト率、情報処理過程への影響を推測する指標として各投球コースの口頭での回答正答率、スイング軌道パターンを評価した。結果として、コンタクト率は時間的制約が厳しくなることで低下し、同じ球速でも不確実性が上がることで低下した。投球コースに関する正答率は低速度の場合に不確実性が高くなることで低下する傾向が見られた。投球スイング軌道に関しては時間的制約が厳しくなることで軌道パターンの減少が見られた。以上の結果から、時間的制約と不確実性が知覚や反応選択といった情報処理を制約することで打撃が困難になる可能性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-14]大学スポーツにおける2年生の役割とチームへの関わり方の検討

大学女子ラグビー部を対象として

*坂部 崇政¹、高井 秀明¹ (1. 日本体育大学)

大学スポーツでは、多くの選手が最終学年まで競技に打ち込むことで、就職活動の遅れや時間的な制約を強いられるため（清水ほか、2010）、4年次の途中や3年次で競技を引退することがある。したがって、大学スポーツにおける2年生は、既にチームの中核的な役割を担う学年であるといえよう。しかし、その一方で2年生は、上級生と下級生との板挟み、成長実感の不足などの理由によって競技へのモチベーションが低下する可能性もある。そこで本研究では、大学運動部の2年生を対象とした心理セミナーから、役割の明確化およびチームへの関わり方について検討した。対象者は、A大学女子ラグビー部に所属する2年生10名であった。心理セミナーでは、個人ワークとして『あなたがチームから求められる能力』を競技・仕事・生活の3側面からそれぞれ2つ挙げさせ、現時点での『習得度』も回答させた。そして、求められる能力と習得度はレーダーチャートに転記させ、チーム内における自分自身の役割と現状を可視化させた。次にグループワークとして、個人ワークの内容を全員で共有した後、同様の手続きで“2年生として”求められる能力およびその習得度を再考させ、レーダーチャートを作成させた。さらにグループワークでは、各能力を高めるためのリーダーを適材適所に配置させ、具体的な取り組みを記入させた。また、心理セミナーの前後には『チームへ貢献できる自信』に関する主観的評価を記入させた。その結果、2年生に求められる能力として競技面では「システム理解」「個々の強みを活かす」、仕事面では「行動力」「発言力」、生活面では「自己管理」「自律する力」が挙げられた。なお、チームへ貢献できる自信の主観的評価では、心理セミナー前後で有意に高まった（ $p<.001$ ）。以上のことから、学年としての役割の明確化は、チームへの帰属意識や貢献への自信を高める可能性を示したといえる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-16]大学運動部活動における動機づけ雰囲気、勝敗に対する態度、 オーバーコミットメントの関係

個人種目と集団種目に着目して

*高山 優明¹、中須賀 巧¹ (1. 兵庫教育大学大学院)

本研究では、個人種目と個人種目に着目し、運動部の動機づけ雰囲気、勝敗に対する態度、オーバーコミットメントの関係について検討することを目的とした。運動部所属の大学生796名を対象に調査を行い、運動部の動機づけ雰囲気を独立変数、勝敗に対する態度を媒介変数、オーバーコミットメントを従属変数としたモデルを設定し、多母集団同時分析によってモデル妥当性の検討を行った。その結果、モデル適合度は基準を満たす値が得られた。次に、有意なパス係数について、個人種目群（328名）は、コーチの能力志向と競争が勝利志向性（それぞれ $\beta=.13$ 、 $.31$ ）に正のパスを示した。また承認はレクリエーション志向性（ $\beta=.25$ ）に正のパス、協調はレクリエーション志向性（ $\beta=-.31$ ）に負のパスを示した。勝利志向性はオーバーコミットメント（ $\beta=.37$ ）に正のパスを示した。一方、集団種目群（468名）は、競争が勝利志向性（ $\beta=.24$ ）とオーバーコミットメント（ $\beta=.31$ ）に正のパスを示し、レクリエーション志向性（ $\beta=-.17$ ）に負のパスを示した。コーチの練習支援はレクリエーション志向性（ $\beta=.14$ ）とオーバーコミットメント（ $\beta=.13$ ）に正のパスを示した。協調はレクリエーション志向性（ $\beta=-.19$ ）に負のパスを示した。コーチの能力志向はレクリエーション志向性（ $\beta=.12$ ）に正のパスを示した。レクリエーション志向性はオーバーコミットメント（ $\beta=-.10$ ）に負のパスを示し、勝利志向性はオーバーコミットメント（ $\beta=.13$ ）に正のパスを示した。個人種目群と集団種目群のモデル内のパス係数にも一部有意な差が認められた。以上のことから、集団種目群と個人種目群では、運動部の動機づけ雰囲気、勝敗に対する態度、オーバーコミットメントへの影響が異なることが明らかとなった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-18]競技中の自動思考とパフォーマンス向上にもたらす機能

大学生競泳競技者を対象とした質問紙調査

*伊藤 浩一¹、土屋 裕睦² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

[目的]本研究では、大学生競泳競技者の競技中の自動思考と思考がパフォーマンスの向上にもたらす機能の関連を明らかにすることとした。[方法]調査対象者は関西4大学の競泳競技部に所属する大学生107名(男性82名, 女性25名)とした。調査内容、フェイスシート(所属大学、性別、学年、競技年数、専門種目、ベストタイム)、スポーツ競技自動思考尺度(ATLS)(有富・外山, 2017)、Function of Self-Talk Questionnaire(FSTQ)(翻訳版)(山田ほか, 2014)であった。分析方法は、ATLSの4つの下位尺度「促進的教示」、「心配・懸念」、「後退・消極的姿勢」、「自信」と、FSTQ(翻訳版)の5つの下位尺度「努力」、「自動性」、「認知・感情コントロール」、「注意」、「自信」のそれぞれについて、Pearsonの積率相関係数を用いた相関分析を行った。[結果・考察]競技中の自動思考を測定するATLSの下位尺度のうち「促進的教示」、「自信」が、思考がパフォーマンスにもたらす機能を測定するFSTQ(翻訳版)の全ての下位尺度との間で有意な正の相関が見られたが、競技中の自動思考「心配・懸念」、「後退・消極的姿勢」はどの項目においても関係が見られなかった。特に、「促進的教示」では「自動性」、「認知・感情コントロール」、「注意」、「自信」では「認知・感情コントロール」、「注意」にて中程度の正の相関が見られた。以上のことから、競泳競技者が競技中に行う自動思考のうち、自身に教示を与えるような思考である「促進的教示」、励ましなどモチベーションを高めるような思考である「自信」は競技中、感情をコントロールし、注意を集中させるという機能を果たし、それがパフォーマンスの向上に繋がっている可能性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-20]サッカー選手におけるレジリエンスが運動再投入と意思決定再投入に及ぼす影響

*北橋 達朗¹、高井 秀明¹ (1. 日本体育大学)

先行研究により、運動再投入と意思決定再投入の傾向があるアスリートは、自動化された動きが注意の高まりによって妨害されることで、パフォーマンスを低下させることが明らかにされている（Masters, 1992）。その一方で、プレッシャー下でも優れたパフォーマンスを発揮できるオリンピック選手は、レジリエンスが高い傾向にあることが明らかにされている（Fletcher & Sarkar, 2012）。本研究では、プレッシャー下でもポジティブに作用する個人特性のレジリエンスがネガティブに作用する運動再投入と意思決定再投入に及ぼす影響について検討することを目的とした。調査対象者は、国内外のプロ・セミプロリーグに所属する男性35名のサッカー選手（年齢18歳以上）であった。調査対象者には、レジリエンス尺度の The CD-RISC（Campbell-Sills & Stein, 2007）と運動再投入尺度の MSRS（Kawabata & Imanaka, 2019）、意思決定再投入尺度の DSRS（Kawabata & Imanaka, 2019）に回答させた。なお、MSRSは動作過程に関する意識と自身の動作が他者へどのように映るのかという自己意識の下位尺度から構成されており、DSRSは意思決定の過程を意識的に確認しようとする傾向と過去の間違った判断を否定的に評価しようとする傾向の下位尺度から構成されている。本研究では、レジリエンス尺度の合計得点と、運動再投入尺度の2つの下位尺度、意思決定再投入尺度の2つの下位尺度の間で Pearsonの相関分析を行った。その結果、意思決定再投入尺度の下位尺度である、過去の間違った判断を否定的に評価しようとする傾向とレジリエンスの間にのみ負の相関が確認された。よって、プレッシャー下における意思決定について反芻傾向が強いサッカー選手には、レジリエンスは効果的に作用する個人特性であるといえよう。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-22]サッカー選手における創造性とマインドワンダリング傾向の関係

*長 雄希¹、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院人間総合科学学術院、2. 筑波大学)

サッカー等のチームスポーツにおいて、ゲーム課題を解決するために創造的な能力が重要視される。一般的な創造性は、現在行っている課題から注意が逸れて自発的な思考を行うマインドワンダリング（以下 MW）と関連があることが明らかになっている。更に、MWの中にも意図的、非意図的の2種類が存在し、各々が創造性に与える影響は異なることが知られている。このような知見がある一方、スポーツ領域における両者の関係性は未だ明らかにされていない。また、スポーツ領域において、創造性はポジションや競技経験、性格特性との関連が深いことが報告されているが、これらの要因と MW の関係性は不明である。そのため、本研究では創造性、MW 傾向、ポジション、競技経験及び性格特性の各要因間の関係性を検討することを目的とした。サッカーの競技経験（経験年数:13.8±2.6年）を有する大学生119名を対象に、基本属性を調査するアンケート調査、MW 傾向や性格特性を測定する質問紙調査、創造性を測定するための一般的な創造性テストを実施した。その結果、日常サッカー場面（プレーが一時的に切れた場面、ハーフタイム場面）の意図的非意図的 MW の総計と、希少的独創性や流暢性（創造性の下位項目）との間に正の相関がみられた。また、日常場面では意図的 MW 傾向が非意図的 MW 傾向より有意に高いが、サッカー場面では非意図的 MW 傾向が意図的 MW 傾向より有意に高いことが示唆された。性格特性においては、外向性や開放性が創造性の各下位項目と正の相関があること、神経症傾向が非意図的 MW 傾向と正の相関があることが示された。以上から、1) 各場面の MW の総計は創造性の一部の下位項目と関連すること、2) 日常場面とサッカー場面で MW 傾向が異なる可能性があること、3) 創造性は外向性や開放性と関連があること、4) 非意図的 MW 傾向は神経症傾向と関連があることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-24]情動知能と自己効力感が運動課題前後の脳波と気分に与える影響

*西垣 景太¹ (1. 東海大学 健康学部)

運動経験と心理・社会的発達に関連する研究は多くなされており、それぞれの運動経験から様々な結果が示されている。個々で獲得した情動知能によって、その後の運動経験や成功失敗体験の受け止め方は異なるのだろうか。本研究では、情動知能と自己効力感の得点が、ゴルフのパットング動作前後の脳波及び気分へ影響を与えているか検討した。

運動経験のある大学生及び大学院生（平均年齢 21.0 ± 1.33 歳）を対象とし、10球のパットング動作を行ってもらった。事前に情動知能測定尺度（以下、EQS）と運動に対する自己効力感尺度に回答してもらい、課題前後の脳波の測定と気分の評価を行った。脳波はフューテック社製の簡易型脳波計 Brain-Pro（FM-939）を使用し、「Analyzer+」によりデータを取得した。瞬きや開眼時にもアーチファクト・ノイズが混入しにくい「センサープロ」を使用し、センサー電極は10/20法による頭頂部 C3・C4、左耳たぶ A1 の3部位に装着し、脳波は $\alpha 1$ 波、 $\alpha 2$ 派、 β 波を分析対象とした。

運動課題前後の脳波への影響を重回帰分析のステップワイズ法を用いて分析した結果、運動前後の $\alpha 1$ 波にはEQSの「自己洞察」「リーダーシップ」、課題後の β 波にはEQSの「自己コントロール」が有意な正の影響を与えていた。また、課題前後の脳波の変化量には、 $\alpha 1$ 波にはEQSの「自己コントロール」が負の影響を与えており、自己コントロールの得点が高いほど $\alpha 1$ 波の変化量は小さくなることが示された。気分の変化量に対しては、「緊張」には「自己洞察」「状況洞察」が有意な負の影響を与えていた。「自己洞察」は自己の感情の理解に該当し、自己評価や自信の程度にも関連し、「自己コントロール」は自分の行動をコントロールする能力に該当し、自制心や自己決定に関わるとされており、これらが課題前後の脳波に影響を与えていることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-26]中学校体育授業における自己調整学習の予備的検討

*須崎 康臣¹、久保 研二¹ (1. 島根大学)

本研究では主体的・対話的で深い学びを自己調整学習と位置づけ、中学校体育授業における自己調整学習について検討することを目的とする。調査は、中学校に在籍する1年生133名（男子64名，女子69名），2年生133名（男子68名，女子65名），3年生131名（男子63名，女子68名），学年と性別が不明1名，計398名を対象に行った。自由記述は，自己調整学習の理論に基づき，3つの学習過程における行動や考えていることについて回答を求めた。3つの学習過程は，予見段階（はじめ），遂行コントロール段階（展開），自己省察（まとめ）であった。得られた自由記述に対して，スポーツ心理学を専門とする教員1名と，保健体育科教育を専門とする教員1名，教育学部の学生8名で，項目をカテゴリーに分類した。分析の結果，予見段階は，目標設定，課題の再確認，意欲の向上の3つのカテゴリーに分類された。遂行コントロール段階は，課題への挑戦，観察学習，イメージ，試行錯誤，モニタリング，仲間との協同の6つのカテゴリーに分類された。自己省察は，自己評価と適応の2つのカテゴリーに分類された。今後は，得られたカテゴリーをもとにして，体育授業における自己調整学習を測定する尺度の開発を行うことが必要となる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-28]対人ストレス及び自己意識があがりに与える影響

大学生アスリートを対象とした量的研究

*大田 亜海¹、土屋 裕睦² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

【目的】本研究では、大学生アスリートにおける対人ストレス及び自己意識があがりに関連しているのかについて検討することを目的とした。【方法】対象者は、体育系大学に所属する運動部員男子学生57名・女子学生25名であった。質問紙調査では、フェイスシート(学年・年齢・性別・競技歴)のほかに、対人ストレス尺度(橋本2005)、自己意識尺度(黒沢1992)、あがり経験の特徴に関する質問紙である FAEQ(有光・今田1999)の3種類の質問紙に回答を求めた。【分析方法】性差を調べるため、3種類の質問紙で得た得点を基に、平均の比較を行った。次に、対人ストレス尺度の3つの下位尺度(対人過失・対人摩擦・対人葛藤)、自己意識尺度の2つの下位尺度(私的自己意識・公的自己意識)、FAEQの6つの因子(自己不全感・身体的不全感・震え・責任感・生理的反応・他者への意識)を Pearsonの積率相関係数を用いた相関分析を行った。分析には、SPSS27.0.1(IBM社製, SPSS Statistics)を使用し、有意水準は5%以下とした。【結果・考察】質問紙で得た男女の得点を基に t検定を行った結果、対人ストレス尺度では女子学生群が有意に高値を示し、FAEQでは男子学生群が有意に高値を示した。次に、相関を検討した結果、対人ストレス尺度の下位尺度である「対人過失」と FAEQの因子である「自己不全感」に中程度の正の相関が認められた($r \geq .40$)。また、対人ストレス尺度の下位尺度である「対人摩擦」と FAEQの因子である「生理的反応」「自己不全感」、自己意識尺度の下位尺度である「私的自己意識」においても中程度の正の相関が認められた($r \geq .40$)。以上の結果より、対人ストレスより引き起こされた対人ストレスとあがりに関連していることが分かった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-30]スポーツ指導現場における体罰発生に関する先行研究の質的検討

体罰が正当化される心理的メカニズムに着目して

*伊藤 麻由美¹、豊田 則成² (1. 帝塚山大学、2. びわこ成蹊スポーツ大学)

本研究は、スポーツ指導現場における体罰についての先行研究を質的に分析し、心理的メカニズムを視覚化することで、体罰防止へ向けての課題や心理的支援を検討することを目的とする。これまで体罰撲滅へ向けて取り組みが進められているが、依然として体罰が報告されており（文部科学省、2021）、今後どのような対策を講じるべきか検討する必要があると考えられる。また、体罰については社会的には暴力とされる行為が、スポーツ指導現場では指導の一環として正当化されているという現状にある。そこで、本研究では「なぜ体罰はスポーツ現場にはびこり続けるのか」というリサーチ・クエスチョンを設定し、体罰の発生や認識に関する先行研究を概観し、その内容を質的統合法（KJ法）を用いて視覚化を試みた。

まず、CiNii（国立情報学研究所）を用いて、「体罰」「スポーツ or 部活動」「発生要因 or 発生 or 要因」のキーワードを組み合わせて検索を行なった。検索された文献のうち、学術雑誌または大学紀要に掲載されているものを分析対象とした。また、対象文献を体罰発生の要因、選手の認識、指導者の認識と選手との関係性に絞り、段階的に分析することで、理論の生成・修正・飽和を目指した。分析手順は、①文献の内容から体罰の発生や正当化についての記述を抜き出し、ラベルを作成し、②ラベル広げ、ラベル集め、表札づくりを繰り返し、③最終的に残ったラベルの内容を端的に表すシンボルマークをつけ、④それらの関係性を説明する関係記号と添え言葉を配置し、空間配置図を作成した。

分析の結果、スポーツ指導現場では保護者要因と法的要因の影響を受けながら、勝利を目指すことへの共通認識が強く根付いており、それらが体罰を正当化する基盤となっていた。さらに、指導実績が残ることで、指導者と選手の関係性において体罰を正当化する連鎖が生じ、体罰がはびこり続けていることが明らかとなった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-32]大学入学時までの運動経験が形成する心理特性

自己愛・特性的自己効力感・レジリエンスに着目して

*長田 実莉¹、小口 愛海¹、小板橋 京汰¹、遠藤 慎也²、西垣 景太^{1,2} (1. 東海大学大学院 健康学研究科、2. 東海大学 健康学部)

自己愛と自己効力感、自己効力感とレジリエンスについてはさまざまな研究がされているが、自己愛とレジリエンスや3つの関連性をみた研究はまだない。今回、自己愛、特性的自己効力感、レジリエンスの関連性を検討するとともに、大学入学時までの運動を通じた経験が自己愛、特性的自己効力感、レジリエンスに及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

大学生に Microsoft Formsを用いたアンケート調査を実施した。対象者は141名(男子66名,女子75名)である。①フェイスシート②運動を通じた経験についての質問③自己愛人格傾向尺度(NPI-35)(小西ほか,2006)の15項目④ General Self-Efficacy Scale(坂野・東條,1986)の16項目⑤二次元レジリエンス要因尺度(川西ほか,2021)の16項目について回答を求めた。

重回帰分析の結果、自己愛の合計得点、特性的自己効力感の合計得点、レジリエンスの合計得点はお互いに正の影響力を持っていることが明らかになった。その中でも、達成感が資質的レジリエンスの楽観性因子と獲得的レジリエンスの他者心理の理解に正の影響を与えていることが明らかになった。達成感には、熱心度、成功体験、挫折経験が正の影響を与えていることが明らかになり、挫折からの立ち直りの有無が獲得的レジリエンスの自己理解に正の影響を与えていることが明らかとなった。資質的レジリエンスは、自己愛と特性的自己効力感に正の影響を与えており、獲得的レジリエンスは自己愛に正の影響を与えていた。運動というカテゴリーの中では、ポジションやレギュラーなどの自分の役割や課題を遂行できたと認識することで、ものごとや自分自身を肯定的に見る力が身に付くのではないかと考えられる。青年期における運動・スポーツを通じた達成感を体験することが大切であることが考えられる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-34]トライアスロン競技における心理的特徴

運動依存と心理的競技能力に着目して

*小口 愛海¹、長田 実莉¹、小坂橋 京汰¹、遠藤 慎也²、西垣 景太^{1,2} (1. 東海大学大学院 健康学研究科、2. 東海大学 健康学部)

数あるスポーツ種目の中でも最も過酷な競技の一つと考えられているトライアスロンだが、近年選手人口も増えている。しかし、練習時間や練習量も求められる中、運動依存に焦点を当てた研究は少ない。そこで本研究では、トライアスロン競技者の心理的特徴と運動依存の影響について検討した。

対象者は、トライアスロン競技者の男女135名とした。徳永ら（2002）の心理的競技能力診断検査（以下、DIPCA.3）の52項目と Hausenblasら(2002)の運動依存尺度（以下、EDS-21）の21項目に、属性や運動経験（性別、所属、学年、年齢、トライアスロン競技歴など：以下、基本データ）の質問項目を追加したアンケートを作成し、Webアンケートで無記名での回答を求めた。

DIPCA.3の各12尺度と合計得点、EDS-21の各7因子と合計得点の相関分析と重回帰分析を行った。相関分析では、EDS-21の8項目中5項目が、DIPCA.3の合計得点と有意な正の相関が見られた。このことから、心理的競技能力が高いほど、競技力向上を目的に運動依存に陥りやすいのではないかと考えられる。さらに重回帰分析では、さまざまな尺度・因子間に影響が見られたが、中でもDIPCA.3の「集中力」にはEDS-21の多くの因子が正の影響を与えている事が明らかになった。これは、トライアスロンにおける3種目練習しなければならないという時間的制約の多い状況が、EDS-21の運動量や時間、継続、合計得点などへ影響を与えているのではないかと考えられる。

本研究では、大学生の低学年に心理的競技能力が高く運動依存傾向が高くみられた。大学生で競技を始めた時は熱中しやすいことが考えられるが、運動依存傾向が高く続くと精神的不調に繋がるとされているため、トライアスロンにおける練習では、運動依存に陥らない程度に自己をコントロールしながら行うことが必要である。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-36]2型糖尿病患者のセルフエフィカシーと生活習慣実態および血糖管理の関連性

治療行動に対する運動・食事・投薬のセルフエフィカシーに着目して

*門脇 未来¹、西垣 景太^{1,2} (1. 東海大学健康学研究科、2. 東海大学健康学部)

2型糖尿病治療では、患者の自己管理によって生活習慣を適正に保つ努力が求められ、食事・運動・投薬治療の全てが必要とされる。そのため、本研究では2型糖尿病患者の治療行動に対するセルフエフィカシー（以下 SE）の重要性を明らかにするため、治療行動に対する SE と生活習慣実態、血糖管理の関連性を検討した。研究参加施設にて外来通院中の2型糖尿病で投薬療法を実施中の患者のうち、研究参加に同意の得られた300名を対象とした。定期受診時に運動・食事・投薬に関する SE と生活習慣実態、血糖管理に関する調査アンケートを実施した。それらの結果と患者背景、採血データを用い統計学的検討を行った。男性198名、女性92名、平均年齢は男性63.1±12.2歳、女性60.0±11.0歳であった。SE合計点に関して重回帰分析を行った結果、生活習慣尺度の運動状況1.29[95% CI : 0.9 1.7]と食事内容0.84[同 : 0.5 1.2]、HbA1c-1.15[同 : -2.1 -0.3]、診察時DBP0.09[同 : 0.0 0.2]が独立した因子であった。多重代入法を用いてROC曲線から求められたSE合計点39点で2群に分け、背景を傾向スコアマッチングさせた結果、SE合計点39点以上の群において、HbA1c7%未満の患者が有意に多かった。さらに運動SEに関して重回帰分析を行った結果、運動状況0.80[同 : 0.6 1.1]、HbA1c-0.75[同 : -1.3 -0.2]、診察時DBP0.05[同 : 0.0 0.1]、BMI-0.11[同 : -0.2 -0.0]が独立した因子として認められた。しかし運動SEに関する傾向スコアマッチング解析では、運動SEと血糖管理に明らかな差は認めなかった。以上から、SE合計点の高さが調査時の血糖管理に影響していると考えられる。ただし本研究は横断研究であり、縦断的な検討が必要であると思われる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-38]高い運動習慣を有する者における運動と認知機能の関係

*土田 幸男¹ (1. 大阪体育大学)

運動は心身の健康維持・増進に効果的であるだけでなく、認知機能に対しても影響がある。運動習慣のある者は認知機能が高いことが報告されており、特に運動習慣が少ない者との比較が報告されている。一定以上の運動習慣を持つ者の中で比較した時、認知機能が向上する運動の効果は、運動量に比例するのだろうか。また、そうした効果は特定の認知機能に限定されるのだろうか、それともより全般的に効果が見られるのだろうか。本研究では高い運動習慣を持つ者を対象に、認知機能と運動習慣の関係を検討した。実験に参加した大学生26名のうち、「健康づくりのための運動指針 2006」で推奨されている週23エクササイズ（EX）を超える運動習慣を持つ者23名（女性9名、男性14名、平均年齢 20.13 ± 1.71 ）を対象とした。運動習慣評価として、国際標準化身体活動質問票を実施し、1週間あたりの運動習慣を評価した。認知機能の評価としてワーキングメモリ課題（音韻、視空間、そして実行系の3種類）、Trail Making Test、そしてStroop課題を実施した。EXと各課題のパフォーマンスとの相関を求めた結果、Stroop課題の一致刺激に対する反応時間との間に負の相関が見られた。高い運動習慣を持つ者ほど、Stroop課題における色と文字が一致している刺激に対して素早い反応をすることができたことが考えられた。一方、反応抑制機能を反映する不一致刺激に対する反応時間との間には相関は見られなかった。各ワーキングメモリ課題やTrail Making Testにおいても統計的に有意な相関は見られなかった。これらの結果から、運動習慣が増加することで単純な反応時間が短くなる可能性が考えられる一方、実行機能のような認知機能においては強い影響が見られない可能性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-40]大学生におけるゲートボールの実施が心理面に及ぼす影響について

運動有能感と気分状態に着目して

*柴原 健太郎¹ (1. 北九州市立大学)

はじめに

近年、若者の体力の低下や運動離れが問題視されている。これらの問題は運動有能感の低さと密接に関連していると考えられる。一般的には、運動に対して肯定的な有能感を体験することで、積極的な運動参加を促し、運動習慣が形成される（大田ら2014）。つまり、自発的なスポーツの実施には運動有能感を高めることが重要であると言える（岡沢ら1996）。

一方で、ゲートボールは年齢、性別、障害の有無やスポーツの得意・不得意等に関わらず、誰もが一緒に楽しめるユニバーサルスポーツとして知られている。そのため、運動有能感が低いものでも比較的容易に楽しむことができるスポーツであり、成功体験が得られやすいと考えられる。また、ゲートボールは、チームスポーツでありチーム内でのコミュニケーションや戦略・戦術が重要となる。そのためチーム内での役割を理解し、他のメンバーと協力して目標を達成することで、運動有能感を高めることができると考えられる。

そこで、本研究は、運動有能感の異なる大学生を対象にゲートボールの実施が運動有能感や気分状態といった心理面に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

方法

A大学に所属する大学生62名（男性：13名、女性：49名）を対象に、授業の2コマを使用し、ゲートボール（180分）を実施した。なお、ゲートボールの前後ではWEBによる質問紙調査を行った。質問紙の調査内容は、運動有能感尺度（岡沢ら1996）、気分プロフィール検査（POMS2）を用いた。運動前に実施した運動有能感の得点から3つの群（low群：19名、middle群：22名、high群21名）に分類を行った。

本研究では各群におけるゲートボール前後での心理面の変化を検討するために二要因分散分析（混合計画）を用いた。なお、統計についてはIBM SPSS 27を使用し、有意水準は5%とした。

結果

結果についての詳細は当日発表する。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-42] コロナ禍から現在にかけての大学生の運動実施状況とメンタルヘルスの変化

*辻田 佳保里¹、西口 治佳¹ (1. 太成学院大学)

近年、我が国における青年期の自殺率の高さが問題視されており、自殺の背景となるメンタルヘルスの悪化をどう防ぐかが課題となっている。令和2年の新型コロナウイルス感染症拡大により大きなストレスがかかる状況が続き、20歳～24歳の自殺死亡率の高さは先進国の中でトップとなった（厚生労働省,2022）。身体活動・運動にはメンタルヘルスの改善を促す効果があるが、コロナ禍の影響でスポーツ実施率も低下した（笹川スポーツ財団,2021）。ポストコロナともいえる現在において適切なメンタルヘルス低下防止対策を考えるためには、コロナ禍から現在に至るまでの青年期の運動状況およびメンタルヘルスの傾向を把握する必要があるだろう。

本研究では、健康スポーツ系の学科に所属する大学生314名（男性248名、女性66名）を対象に、令和2年～令和5年にかけて毎年4月～5月に合計4回にわたって質問紙調査を行い、コロナ禍から現在にかけての運動とメンタルヘルスの関連についての変化を検討した。Google Formsにて現在の運動習慣に関するアンケートと精神的健康度診断検査（橋本・徳永,1999）への回答を求め、調査年別・運動習慣の有無別にメンタルヘルスパターンの割合を算出した。

その結果、令和2年のメンタルヘルスは、コロナ禍以前に行われた調査結果（橋本・徳永,1999）と比べて低ストレスを表すはつらつ型とゆうゆう型の合計割合が低く、高ストレスを表すふうふう型とへとへと型の割合はそれぞれ2倍以上高かった。調査年ごとの比較では、令和2年は他の年と比べてへとへと型（ストレス高・生きがい低）の割合が高く、令和3年にはへとへと型の割合が大幅に低下しているものの、その後令和4年、令和5年にかけて徐々に高くなる傾向がみられた。また、運動習慣のある学生は運動習慣のない学生に比べてはつらつ型の割合が高くなり、へとへと型の割合が低い傾向がみられた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-44]女性スポーツ競技者の食行動異常に関係する適応・不適応的感情調節方略

*相羽 枝莉子¹、松田 晃二郎²、杉山 佳生³ (1. 長崎国際大学、2. 熊本学園大学、3. 九州大学)

女性スポーツ競技者において有病率が高く、深刻な精神疾患の一つに摂食障害がある。摂食障害の主症状として、過度な食事制限や過食などの持続的な「食行動異常」があるが、これらは摂食障害の発症に先行するリスク要因でもある (Jacobi et al., 2004)。近年の研究では、この食行動異常と関連する要因として「感情調節」が着目されており (e.g., Wollenberg et al., 2014)、例えば、反芻や表出抑制といった方略を使用する人ほど食行動異常に認められやすいことが報告されている (Aldao et al., 2010; 村山, 2021)。しかしながら、日本人女性スポーツ競技者の食行動異常と感情調節の関連を検討した研究はほとんど報告されていない。そこで本研究では、女性の大学生スポーツ競技者に着目し、食行動異常と感情調節方略の関連について検討することを目的とした。なお、本研究は、研究代表者が所属する機関の研究倫理委員会から承認を得た上で実施された。本研究では、大学運動部に所属する女性のスポーツ競技者127名 (平均年齢 19.84 ± 86 歳) を対象に、Web上でアンケート調査を実施した。調査では、食行動異常については、新版食行動異常傾向測定尺度 (山蔦ほか, 2016) を用い、感情調節方略については、日本語版 CERQ (榎原, 2015) および感情調節尺度日本語版 (吉津ほか, 2013) を用いて測定した。分析の結果、食行動異常の3つの形態 (非機能的ダイエット、食事へのとらわれ、むちゃ食い) に対して、それぞれ不適応的感情調節方略の使用傾向が関係している可能性が示唆された。また、感情調節方略のうち、計画への再焦点化という方略が「食事へのとらわれ」に対して負の方向に寄与していた。以上より、女性スポーツ競技者の食行動異常を促進させる感情調節方略に加え、食行動異常を抑制させる感情調節方略についての知見が得られた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-46]アスリートの制御焦点が試合中の対処方略とパフォーマンスに及ぼす影響

*相川 聖¹、高井 秀明² (1. 関西学院大学、2. 日本体育大学)

人の快・不快に対する接近と回避は、促進焦点と防止焦点という制御焦点によってコントロールされる（Higgins, 1997）。さらに、個人の制御焦点と目標達成に向けた方略が適合することで、パフォーマンスは向上することが示されており（Higgins, 2000）、アスリートは制御焦点に適合した方略を用いてパフォーマンスを高めているものと考えられる。よって、本研究の目的は、アスリートの制御焦点が試合中の対処方略とパフォーマンスに及ぼす影響について検討することとした。調査は A大学の体育専攻学生を対象とし、Googleフォームを用いて実施された。分析対象者は325名（男性155名、女性166名、回答なし4名）であった。対象者には Promotion/Prevention Focus Scale邦訳版（尾崎・唐沢，2011）をスポーツ場面に適用させた尺度、日本語版 Coping Inventory for Competitive Sports（相川・高井，2022）、競技パフォーマンスに対する自己評価尺度（上野・小塩，2016）に回答させた。分析の結果、促進焦点群は防止焦点群よりも、思考のコントロールや心的イメージ、リラクセーション、努力の消費、論理的分析の得点が有意に高かった。防止焦点群は促進焦点群よりも、不快な感情の発散と離脱・諦めの得点が有意に高かった。また、促進焦点群の心的イメージや防止焦点群の思考のコントロールは、競技パフォーマンスに対する自己評価に有意な正の影響を与えた。本研究の結果はアスリートの制御焦点の特徴を反映しているものと考えられ、制御焦点の違いは試合中の対処方略に影響を与えるものと考えられる。また、制御焦点の違いによってパフォーマンスを向上させる対処方略は異なることも示され、アスリートの制御焦点に適合する方略の提案に貢献できる知見が得られたといえる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-48]フィギュアスケート競技者に着目した「不安」「緊張」と実力発揮との関連性

*門前 朋実¹、笹場 育子¹ (1. 立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科)

競技場面において、スポーツ選手は「不安」や「緊張」など様々な心理的プレッシャーを受ける事で、競技パフォーマンスの発揮が妨害される事がある(猪俣,1986)。

したがって本研究では、フィギュアスケート競技者に着目した「不安」及び「緊張」と実力発揮との関連性を明らかにし、実力発揮へ繋げるための効果的な活用方法を追求する事を目的として、日本学生氷上選手権大会出場経験があるフィギュアスケート競技者3名を対象に半構造化面接を実施した。インタビュー結果の分析には、グラウンデッドセオリーアプローチ(戈木, 2016)を用いた。

本研究結果において、フィギュアスケート競技者における「不安」及び「緊張」を実力発揮に繋げる効果的な要素として、「緊張からの解放」「失敗に対する覚悟」「試合での緊張の向き合い方」の3つが挙げられた。1つ目の「緊張からの解放」では、緊張場面において「緊張しているという事は集中しているという事」というように、緊張をポジティブに捉える事で集中力が高まる事がわかった。2つ目の「失敗に対する覚悟」では、日頃から失敗を恐れず覚悟を持って練習する事が、試合中の失敗に対して最大限の努力の結果として受容する心理的受け皿に繋がり、失敗後も動揺せず緊張をコントロールできる可能性に繋がると示された。最後に3つ目の「試合での緊張の向き合い方」では、対象者は「日頃の努力を基に成功の可能性を信じる」と話しており、これはBandura(1997)の「自己効力感とは自分の成功の可能性を認識する事」を指示している事から、実力発揮に繋がると推察された。以上3点に加え、ルーティーンを用いて外的要因に影響されないいつもの空間を作る事が、安心感に繋がり実力発揮の一助になると示唆された。

以上から、上記3つの要素とルーティーン的确立が「不安」及び「緊張」を抱く状況下における実力発揮の実現に効果的であると考えられた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-50]大学新入生に対する適応支援プログラム介入の効果

質問紙調査による縦断的検討

*渡邊 浩輝¹、三石 祐馬¹、池田 和司¹、渋谷 愛佳¹、大田 亜海¹、伊藤 浩一¹、中山 亜未²、菅生 貴之³、土屋 裕睦³

(1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学スポーツ科学センター、3. 大阪体育大学)

【目的】本研究は、前年度学生スポーツメンタルトレーニングチーム（以下：学生 SMTチーム）が実施した、新入生に対するサポートの効果の検討を行うことを目的とする。【方法】調査対象者は、体育系大学に所属する新入生アスリート48名であった。新入生アスリートの生活様式に関して調査する為に、岡ら(1998)が作成した日常・競技ストレス尺度(4件法)、西野・土屋（2002）が作成したストレス対処方略尺度(7件法)、Katagami and Tsuchiya(2015)が作成した日本語版 ARSQ-J(5件法)、上記の4つの質問紙の項目について最近(2-3週間)を想起してもらい、その状況の時にどの程度あてはまるかを回答してもらった。これらの質問紙を新入生サポート実施前後に回答してもらった。分析方法はそれぞれの質問紙の新入生サポート実施前後の変化量と、橋本・徳永（1999）が作成した精神的健康パターン診断検査（MHP.1）の新入生サポート実施前後の変化量に関連があるのかを検討するため、相関分析を実施した。【結果・考察】MHP.1のQOL得点に関しては、日常・競技ストレス尺度の「自己に関する内的・社会的変化」と負の相関関係が確認され、ストレス対処方略尺度の「情動中心対処」の因子、ARSQ-Jの「物質」の因子と正の相関関係が確認された。大学新入生に対する適応支援プログラム介入を行った研究では、ストレス対処方略やサポート受領を高めることが報告されている(池田ほか,2023)。本研究の結果においても大学新入生に対する適応支援プログラム介入はストレス対処やサポート受領を促進させ、QOLを高める可能性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-52]大学生アスリートにおける認知的方略と心理的競技能力の関係

*藤本 太陽¹ (1. 福山平成大学)

これまで、スポーツ領域では「不安が少なく、自信に満ち、否定的な思考が生じないことによって、最適なパフォーマンスが発揮される」と考えられてきたことから、否定的な思考を変容させ、否定的な感情を減ずることを目的とした研究や実践が行われてきた（有富，2022）。しかし、近年では、認知や感情を変化させることにより、逆説的効果（Wegner, 1994）や、逆にパフォーマンスが低下することが指摘されており（熊野，2012）、単に否定的な思考を肯定的な思考に変容させるのではなく、個人の特性を考慮した介入が求められている（有富・外山，2018）。この個人特性について、認知的方略が注目されており、パフォーマンスとの関係について検討することが求められている。しかし、スポーツ領域における認知的方略の研究は少なく、その特徴についても未だ不明な点が多い。そこで本研究では、アスリートの認知的方略の特徴について心理的競技能力から明らかにすることを目的とした。調査対象者は大学生アスリート215名であった。調査内容は認知的方略尺度（外山，2015）、心理的競技能力診断検査（徳永・橋本，2000）であった。分析の結果、大学生アスリートの認知的方略は4つの異なるパターンが存在することが示された（悲観主義群（RP群）、方略的楽観主義群（SO群）、非現実的楽観主義（UO群）、防衛的方略群（DP群））。次に、性別、競技レベルにおける認知的方略の4群の出現率については、いずれも人数の偏りはみられなかった。続いて、認知的方略と心理的競技能力の特徴については、「競技意欲」「自信」「作戦能力」「協調性」「総合得点」において、SO群とDP群はRP群、UO群よりも得点が高いことが示された。これらのことから、SO群とDP群は心理的競技能力が高いという特徴がみられ、競技場面で実力を発揮するには望ましい方略であることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-54]ソフトボールの守備におけるプレッシャー下での失敗から成功に至るまでの思考の推移

*細野 桃子¹、田中 美吏²、三森 裕希子² (1. 武庫川女子大学大学院、2. 武庫川女子大学)

スポーツ場面において失敗はつきものである。プレッシャー下で失敗をすると、その後のプレーでも失敗をする確率が高くなることが Harris et al. (2019、2021) により明らかにされた。しかし、プレッシャー下で失敗をした後のプレーにおいて成功を収める事例もよく見かける。このような場面での競技者の思考について知見は得られていない点から、本研究ではソフトボールの守備場面を取り上げ、プレッシャー下で1つの失敗が生じた後、同じ試合中にパフォーマンスの成功を収めた場面の思考の推移を明らかにすることを目的とした。

大学生以上のソフトボール競技経験者3名を対象に、個別に半構造化インタビューを行った。基幹質問項目は、①失敗場面の状況、②失敗前後の思考、③失敗後に用いた対処方略、④失敗後の周囲からの反応、⑤その後の成功場面の状況、⑥成功前後の思考、⑦成功後の周囲からの反応、⑧この時の思考・行動の自己評価とした。データ分析は SCAT (大谷、2008) を用い、各対象者の思考の推移についてストーリーラインを作成した。

ここでは1事例のストーリーラインを紹介する。A選手は、1点取られたら負けというプレッシャー場面で、重責と緊張感があり、1つの失敗が生じた。失敗直後は、後悔し頭が真っ白になった。さらに緊張感の増加が生じ不安感は継続されたが、次のプレーで直ぐに成功を収めた。成功後には安堵感とともに油断しない気持ちを抱き、集中力の継続を意識した。試合が進むにつれ、その後にも成功を収めた A選手は、反省は試合の後にすると決め、今に集中し、目の前のことを思い切りやることだけを考えていた。以上のように1試合中に、失敗→成功→成功を収めた事例で、1つ目の成功場面と2つ目の成功場面では異なる思考が見られた。2つ目の成功場面のような、失敗を引きずらず今に集中する心理状態を早い段階で身に付けることが望まれる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-56]女子ラグビー選手の状況判断に関する検討

ポッドアタック時の視点に着目して

*人羅 美帆¹、高井 秀明²、坂部 崇政² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

環境が絶えず変化するオープンスキル種目では、ゲームを優位に進めるために適切な状況判断（Decision Making；以下、DM）が求められる。中でも、15種類のポジションが存在するラグビー競技では、それぞれの役割をゲーム状況に応じて遂行しなければならず、経験ポジションが認知構造に個人差を生じさせる要因になる可能性が示されている（落合ほか、1992）。また、適切なDMを遂行するため、熟練したスポーツ競技者は特有の視覚探索方略を用いていることが報告されており（石橋ほか、2010）、ラグビー競技では司令塔を担う選手においてそのような傾向がみられるものと予想される。そこで本研究では、女子ラグビー選手を対象とし、競技歴およびポジションと視線行動がDMに及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。実験参加者は、大学生以上の女子ラグビー選手38名であり、競技歴で3群、ポジションで3群にそれぞれ分けて比較検討した。実験課題は、ラグビーの試合状況を再現した映像観察中にスペースを判断させるものであり、参加者には6つの選択肢から1つを選び、対応したキーボードを押させた。その結果、課題の正答率については、ポジションでは違いがなく、競技歴では熟練者群が他の2群よりも高い傾向を示し、本研究においても状況認知能力とスキルレベルの間に積極的関連（中川、1982）がみられた。視線行動の主観的評価については、熟練者および中熟練者群は「自分の前から外側のスペース、そして内側のスペース」へ視線を動かしており、非熟練者は「外側のスペースから内側のスペース」へと視線を動かしていることが明らかとなった。熟練者および中熟練者群では、自ら前にボールを運ぼうとする戦術が視線移動として反映されたものと推察される。以上のことから、女子ラグビー選手のDMには、ポジションよりも競技歴が深く関与していることが示された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-58]移動行動時の姿勢動揺リスクを考慮した動作準備の最適化

行動選択肢の確率操作を用いた検証

*渡邊 諒¹、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学)

スポーツ対戦場面で相手の動きに対応する際、確率が高い行動を予測して動作準備するのは、迅速な運動遂行に有益である。しかし、確率が高い行動を重視しすぎると、他の行動に対処する際に姿勢が不安定になり、目的が達成できない可能性がある。よって、確率上のメリットだけでなく、姿勢動揺のリスクを回避できる動作を準備する必要があると考えられる。そこで本研究では、確率の高い行動選択肢がある状況下でも、姿勢動揺リスクの高い行動を常に考慮した動作準備がなされるか検証した。

若齢健常者7名を対象に実験を行った。参加者は静止立位で前方のモニターに表示される方向を判断した後、指定された方向の床目印に右足でステップすることが求められた。姿勢保持の難易度を操作するため、右足から見て内側（難）と外側（易）の二方向に床目印を配置した。Single条件では、最初から一方向のみ表示された。

Dual条件では、最初に二方向が同時に表示され、参加者が足部離地を行った後にどちらか一方が表示された。Dual条件では、最終指定される内側と外側の確率を(0.5-0.5：確率均等)と(0.2-0.8：確率不均等)に設定した。参加者のステップ動作を準備している方向を判定するため、蹴り出し時点における支持脚への骨盤側方移動速度を分析した。

Single条件内で比較したところ、内側ステップ時の方が外側ステップ時に比べて支持脚への骨盤移動速度が有意増加した。また、条件は、提示確率の操作によらずSingle条件の内側ステップ時と同様の移動速度であった。この結果は、外側方向の確率が高い状況下においても内側方向（姿勢保持難度の高い方向）への着地を考慮した動き出しが行われたことを示唆する。このことから、確率的に低いとしても、実際にその行動をしなければならない時の姿勢動揺リスクを低減できるように動作準備がなされることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-60]不器用な人の支援を目指した VRボール捕球システムの開発

*清水 海斗¹、井上 純輝^{2,1}、渡邊 諒¹、梅森 拓磨¹、白川 由佳^{3,5}、中本 浩揮⁴、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学、2. ソニーグループ株式会社、3. 慶応義塾大学、4. 鹿屋体育大学、5. 日本学術振興会特別研究員)

不器用さの問題は、運動を楽しめないという問題に加え、日常生活の質や将来の疾患リスクなど、二次的問題も引き起こしうる。発表者らは、運動の不器用さが表われやすいボール捕球について、「ボールを見る際の頭部運動制限を改善出来れば、視覚だけでなく前庭感覚情報に基づくボール軌道の知覚が可能となるため、捕球を改善できる」という仮説をもっている。本発表では、頭部運動改善を引き出すために開発したVRシステムの妥当性を検証するため、VR環境下でのボール捕球が実環境の捕球動作を再現しているか検討した。

一般成人16名（うち2名は分析から除外）が、実環境およびVR環境にて、フライボールを片手・座位で捕球した。実環境では、トスマシンから投射される実物のボールを捕球した。VR環境では、ヘッドマウントディスプレイを装着し、VR映像を観察しながら、CGのボールを捕球した。ボール軌道の最高到達点に基づき、High条件とLow条件を実施した。両環境下におけるボール捕球精度の比較のため、捕球成功率を算出した。

捕球成功率について、High、Lowの両条件下でVR環境（高軌道41%、低軌道60%）の方が実環境（高軌道78%、低軌道86%）に比べて低かった。VR環境下の捕球成功率は、実環境下の捕球成功率が高い参加者でも低値だった。これらの結果は、VR環境のボール捕球難易度が、実環境に比べて高いことを示唆する。

今回の結果について、ボール捕球の上手さ・苦手さに、頭部運動が関与するか追加分析を行う。なお、今回のVRボール捕球課題は、発表者らの当初想定より難易度が高かった。今後の研究では、VR環境において、捕球成功率を実環境に近づけるため、VR上での捕球定義、捕球の仕方を改良し、追試を行う予定である。さらに、ボールの動きに合わせた頭部運動を誘導する課題をVR環境で作成し、捕球動作のタイミングに改善がみられるかを検討予定である。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-62]視覚誘導性自己運動感覚（ベクシオン）と身体運動経験の関係

*小林 莉子¹、妹尾 武治²、森 将輝¹ (1. 慶應義塾大学、2. 九州大学)

先行研究では、長期的な視覚経験が視覚誘導性自己運動感覚（ベクシオン）に影響を及ぼすことや、動く部屋において競技者と非競技者では立位姿勢の足圧中心に影響を及ぼすことが明らかにされている。しかし、長期的な身体運動経験がベクシオンに与える影響はあまり定かではない。本研究は、身体運動経験がベクシオンに及ぼす影響を検証することを目的とした。実験参加者44名は、ベクシオンを喚起する刺激15種類を60インチのモニターで30秒間観察し、ボタン押しによる潜時・持続時間と、0-100の101段階で主観的強度を報告した。また、実験参加者は、矢野ら（2017）の研究を参考に作成されたスポーツ・身体運動経験に関する質問票に回答した。刺激は、撮影者がアクションカメラを手に持ちプールで泳ぎながら撮影した動画5種類（プール条件）、撮影者が頭部にアクションカメラを固定し大学構内で撮影した動画5種類（キャンパス条件）、実験者がUnity上で黒色球体内において小光点が放出される様子を録画した動画5種類（ランダムドット条件）であった。運動経験年数とベクシオン3指標（潜時・持続時間・主観的強度）の間に相関係数を求め、無相関検定を行なった結果、潜時と運動経験年数は全ての条件で有意な負の相関があった。ランダムドット条件では、持続時間と運動経験年数は有意な正の相関があった。それ以外の相関係数は有意でなかった。さらに、週当たりの運動頻度を考慮に入れた運動経験年数とベクシオン3指標の間に同様の分析を行った。その結果、ランダムドット条件では、運動頻度を考慮に入れた運動経験年数は、潜時と有意に負の相関があり、持続時間と有意に正の相関があった。それ以外の相関係数は有意でなかった。本研究の結果は、週当たりの運動頻度を考慮に入れるかに関わらず、身体運動経験が多いほど拡散運動するランダムドットに対するベクシオンが強くなることを示唆する。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-64]スポーツ版実行機能質問紙の妥当性

ストループテストによる検討

*浦 佑大¹、高井 秀明² (1. IPU・環太平洋大学、2. 日本体育大学)

スポーツにおけるパフォーマンス発揮には、高次認知機能である実行機能が関与している。実行機能の測定方法としては種々のテストバッテリーが存在するが、実施者の専門的知識の必要性和対象者の高い認知的負荷は、スポーツ現場でのテストバッテリーの活用を妨げる要因となる。そこで、浦・高井（2022）は、アスリートの実行機能を簡易的に測定するための尺度として「スポーツ版実行機能質問紙」を作成している。本研究では、スポーツ版実行機能質問紙の下位尺度得点とストループテストの相関関係を検討し、スポーツ版実行機能質問紙の妥当性を確認することとした。実験参加者は、体育学を専攻する大学生・大学院生12名（男性5名、女性7名、平均年齢 21.83 ± 1.34 歳）であった。実験参加者には、スポーツ版実行機能質問紙への回答を求め、実験課題としてe-primeによって作成したストループテストを実施させた。ストループテストでは、刺激として「あか」「みどり」「あお」「きいろ」がそれぞれ黒色、赤色、緑色、青色、黄色で着色された画像20種、各色のパッチ画像4種の計24種類の画像を用いた。課題は、ストループ条件と逆ストループ条件の2条件とした。スポーツ版実行機能質問紙の各下位尺度得点とストループ干渉率との相関分析の結果、抑制下位尺度にのみ有意な強い負の相関が確認され（ $r = -.71$, $p < .01$ ）、注意の維持、熱中、計画、自己意識、効率、切り替えには有意な相関関係は確認されなかった。この結果は、抑制得点の高い者ほどストループ干渉を抑制できることを意味する。ストループテストは、優勢的・自動的な反応を文脈に応じて抑制する能力が求められる課題であるため（諏訪部・征矢、2014）、本研究では抑制にのみ相関関係が確認されたものと推察される。したがって、実行機能質問紙の「抑制」下位尺度は、十分な妥当性を有しているといえるだろう。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-66]身体図式の構築から捉えた技術習得過程の特徴

身体性のあり方を捉える試み

*小谷 克彦¹ (1. 北海道教育大学)

現代の体育・スポーツでは科学化が進んだことにより効率の良いトレーニングが行われるようになった。特に ICT 技術が発展し、手本となる動画を簡単に観ながら技術を習得することができるようになった。しかしながら、その反面、身体を“モノ化”して自身と身体を乖離させてしまう傾向もあるように感じる。動画という付加的なフィードバックを頻繁にかつ正確に得られてしまうことで、自身の身体を道具として扱いすぎしまい、その結果、身体への気づき（身体性の構築）なしに技術を習得してしまっていると言える。身体への気づきなし技術を習得していくことが、停滞した際にその解決をより困難にすることだけでなく、場合によっては体育・スポーツに対する動機の喪失にも繋がっているなど多くの問題の背景になっていると思える。

そこで本研究では、技術習得過程の体験について改めてその特徴を検討することを目的とする。本来、技術を習得するために幾度ものの試行錯誤を繰り返している。そしてその際に技術を習得するだけでなく、“他のもの（身体性など）”も同時に習得している。本研究では、技術習得と同時に得ている“他のもの”を明らかにし、改めて技術習得の意義を検討し直すものである。

本研究では、大学生（40人）にジャグリングやけん玉の技術習得の過程を記録（日誌）してもらい、その記録をもとに身体図式の構築から捉えた技術習得過程の特徴を検討した。練習期間は、3ヶ月間（週に2、3回）とし、練習実施後に実施した内容とその感想を記録してもらった。また、3ヶ月の間に3回のグループ討論をし、各自の課題を確認する機会を設定した。そして、本研究に参加した40人の中から詳細に記録を残していた17名を主な分析対象とした。

学会当日では、大学生がジャグリングやけん玉の技術習得にみられた特徴、特に技能とは異なった“できる”内容の詳細について発表する。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-68]高校野球・リーダーとフォロワーの関係

変革型リーダーシップの視点からとらえた指導者と選手の関係

*柴山 寿治¹、来田 宣幸¹ (1. 京都工芸繊維大学)

第3期スポーツ基本計画で取り組む視点として、スポーツを「つくる／はぐくむ」などがあげられている。この「つくる／はぐくむ」は、自主性・自律性を促せるような指導ができる質の高いスポーツ指導者の育成を目指したものであり、学校の運動部活動が新たな充実した取組みとして、優れた指導者の育成をすすめるものと捉えることができる。指導者にはリーダーとしての役割が重要であり、本研究では、指導者のリーダーシップ行動について指導者の自己認識と選手による認識に焦点をあてて、その特徴を明らかにすることを目的とした。高校野球の選手約1,000名と指導者30名を対象として、インターネット上での質問調査を実施した。調査は、夏原他(2020)の変革型リーダーシップ尺度(DTLI-YS)と田中(2014)の多水準自己概念尺度を使用した。指導者のリーダーシップ行動および自己概念について指導者の自己評価と選手による他者評価により定量的に評価した。選手の評価と指導者の評価の差をリーダーシップおよび自己概念のギャップ値として、因子構造を確認し、クラスター分析をおこなった。本研究の結果、30チームは4つのクラスターに分類することができ、リーダーシップのギャップ値の傾向から「指導者主導型」、「選手主導型」、「選手慎重型」、「指導者・選手協調型」と命名した。先行研究において、コーチの変革型リーダーシップがパフォーマンスの向上だけでなく、選手の内発的動機づけや集団凝集性など、選手の行動的側面や心理的側面において良い影響をもたらしていると報告されている。本研究ではギャップ値を用いることで4つのグループに分類でき、類型ごとのリーダーシップや自己概念の特徴を確認することができた。また、変革型リーダーシップにおいて、リーダーの自己評価だけでなく選手からの評価を用いることで、チームの特徴をより多面的に評価できる可能性を示すことができた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-70]スポーツと Grit（グリット）の現状と研究動向について

*岩尾 敬太¹ (1. 国土館大学大学院)

人の成功を考えたときに注目されているのが、グリット（Grit）である。グリットとは、Duckworthら（2007）により長期的な目標を成し遂げられるかに焦点を当て、困難や失敗、競合目標にもかかわらず、長期目標に対して示される「情熱」と「粘り強さ」と定義されている概念である。グリットを測定するには自己評定式の尺度がDuckworthら（2007）により開発されている。尺度は「興味の一貫性」と「努力の粘り強さ」という、2つの下位尺度（各6項目）から成る。スポーツ界においては、この尺度を用いて様々な角度から調査研究がなされている。例えば、競技成績とグリットの関連（2018）や部活動経験とグリットの関係（2022）などがある。ただ、一貫性のある方向で研究が進められていない現状もある。さらに、今後、スポーツ活動との関連においては、グリットがどのように育まれ・養われるかといった機序に着目することも必要であろう。そこで、本研究では、現状のスポーツ活動とグリットに関連する研究を外観しその研究動向を整理することを目的とする。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（偶数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 11:00 ～ 12:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-72]直線狭路における自転車走行中の頭部動作と眼球運動の相互相関

*小嶋 岳¹、長 雄希¹、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

人が環境内を移動するとき、視野を安定させるための眼球反射が発生する。眼球反射としては、OKR(optokinetic response, 視機性眼球反応)とVOR(vestibulo-ocular reflex, 前庭動眼反射)が挙げられる。OKRは網膜上の像のブレにより像を追従するような眼球運動が誘発され、VORは頭部の動きにより頭部と逆方向に眼球運動が誘発される。先行研究では、直線狭路における自転車走行中にOKRの発生が報告されている。しかし、同研究では頭部動作の影響を考慮していないため、VORとOKRは区別されていない。そこで本研究では、頭部動作および眼球運動を測定することで自転車走行中に発生するVORとOKRを区別することを目的とした。参加者(19名の成人)が、一般的なシティサイクル(タイヤ径27インチ)に乗車し、板上(幅12cm、長さ30m、高さ13mm)をなるべく逸脱しないように3回走行した。ヘルメットに装着したモーションセンサーのピッチ方向を頭部動作、グラス型眼球運動測定装置の上下方向を眼球運動として分析した。取得した頭部動作および眼球運動データの位相ずれ0における相互相関係数(r)を算出した。 $-1 \leq r \leq -0.3$ を負の相互相関、 $-0.3 < r < 0.3$ を無相関、 $0.3 \leq r \leq 1$ を正の相互相関とした。分析の結果、19名中13名は正の相互相関係数を示し、頭部の振幅は眼球の振幅よりも小さいものの、頭部と眼球が同じ方向に連動して動いていることが確認された。また、3名は負の相互相関係数を示し、頭部と眼球が逆方向に動いていることが確認された。さらに、3名は無相関を示す試行が含まれた。以上のことから、直線狭路における自転車走行では頭部と眼球が逆方向に動くVORよりもOKRが主に発生している可能性が示された。また、OKRと同方向に頭部が動いていることが示唆された。